

第2回南陽市小中学校適正配置等検討委員会議録（概要）

日時：令和6年4月25日（木）

午後7時～8時50分

場所：南陽市役所4階 大会議室

○欠席者 無し

○委員長挨拶概要

- ・今日の会議は全員が出席ということで、色々な視点から内容のある話が出ることを期待。
- ・今日、新聞に「消滅可能性自治体」の記事があった。今後30年から50年の間に、1,741ある市区町村のうち744の市町村が消滅してしまうという内容。特に秋田・青森・山形の東北三県が危機的な状況とのこと。これから各市町村においてこれに歯止めをかけるような取組がなされていくのではと考えている。
- ・以前、南陽市で中学校の再編検討委員会が立ち上がった時は、南陽市の8地区から「学校をなくさない」という話が上り、中学校は残せなくても、小学校と抱き合わせて残せないか、また児童館や保育園と一体化した教育施設とすれば残るのではとの話になり、その時からいわゆる「小中一貫教育」に踏み出した経過がある。これは当時全国に先駆けてのものだった。
- ・現在は少子化待ったなし。委員からは忌憚なく意見を。また、会として意見を一つにまとめることはない。複数の案を教育委員会に出し、市長部局と調整してもらえば良い。

○「説明及び協議」の導入前に、4月から就任した堀新教育長より挨拶があった。

○説明及び協議 議長：猪野委員長

(1) 検討委員会の役割について（説明：学校教育課長）

- ・令和5年3月、南陽市長から教育委員会に対し、市内小中学校の適正規模・適正配置に関する計画策定に関する方針策定の依頼があった。
→本検討委員会を設置し、適正規模等に関する審議を行うことに。
- ・委員会において「児童生徒数の将来設計の検証」及び「適正規模等に関する審議」を行い、それをもとに「適正規模・適正配置に関する方針（案）」を整理する。
- ・教育委員会では、委員会での結果をもとに方針を策定し、市長へ報告する。

(2) 南陽市が描く教育の将来像について（説明：学校教育課長）

- ・第六次南陽市教育振興計画（六教振）に基づき教育活動を展開。
→地域の教育力を連携・連動し取組む「地域総合型教育」を推進。
- ・授業の様子は「知識量の蓄積」から「探究的な学び」、「教えてもらう」授業から、「自ら学び取る」授業へと変化しつつある。
→友達との議論やICT機器の活用等により子ども達の学びの充実
- ・学習指導要領でも、育成すべき資質能力として「学びに向かう力」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」が示されており、教職員は授業改善に取り組んでいる。
- ・令和6年度、小学生1,306人、中学生749人、合計2,055人（R5比 -60人）
→これまで南陽市では、学校が小規模であっても、その良さを活かした教育活動を展開してきた。地域における学校の役割や働き、元気な潤いを与える存在としての学校。
また、地域文化や生活の振興も大切にしてきた。

- 一方で、小規模校の課題点も浮き彫りに。「学び合いの機会が少ない」「クラス同士の切磋琢磨の機会がない」「部活動数、部員数の減少により選択肢が少なくなっている」「教員が免許外の教科を受持つ必要が出る」など。
- このことをふまえ、南陽市教委としては「子ども」を主語に考え、一定規模の集団を確保する必要性を考えると同時に、「地域総合型教育」のもと、幼保小中一貫教育に適した環境整備を同時に進めていく。
- ・国の基準は小中学校ともに「12 学級以上 18 学級以下」
- 南陽市は、H16 に「基本的には 12 学級以上 24 学級以下で、中学校については 1 学年 3 学級以上 9 学級以下を目指すのが望ましい」としていた。
- 近年、これを満たせない中学校が生まれており、新たな方針の策定が必要に。

(出された主な質問・意見)

(質問)

Q. 平成 19 年度中学校再編時において、当時の適正規模の方針として具体的な学級数が示されていたわけだが、「学級数」以外の具体的な策定内容というのは何かあったらどうか。あれば参考になると思う。(大友委員)

A. 策定内容の中心は学級数を基準とした方針であったが、それに加えて「通学距離を公平にする考えを考慮すること、適正規模並びに通学距離の公平性を考慮することが望ましい」ということと、「統合を行う場合は該当校のいずれも対等的な統合ということで設置するのが望ましい」という記載があった。(学校教育課長)

Q. 「子どもにとって望ましい学習環境」として、「地域総合型教育」から「幼保小中一貫教育に適した環境」とはどういうことかを、今やっている事業と併せて説明してほしい(廣居委員)

A. 「地域総合型教育」は、地域の教育力を活かしながら連携連動した取組を進めることで、子供はもちろん、地域も活性化していくことを狙った取組み。この、地域のゆるやかなネットワークの中に「幼保小中～」も含まれており、幼保⇔小、小⇔中と連携することで、子どもの育ちや学びを「輪切り」にせず、連続的に捉えるということを進めている。実例として、小規模校であっても、地域の方々と共に活動する等の実践がなされているが、さらに学びを広げたり深めたりするためには、多様な機会を得たり、学ぶフィールドを広げたりすることを考えていく必要がある(学校教育課長)

(補足) 道徳性診断テストを見ると、小学校 5・6 年生時に心情面の指標が上がるものの、中学校でぐっと落ちてしまうということがあり、実験的に小学校の先生に中学校で道徳の授業をやってもらったことがある。

逆に性の問題については低年齢化していることから、中学校の先生が小学校に出向いて性教育を行うことをやっている。お互いに弱い所を補い合うことが大事(猪野委員長)

Q. 荻小と宮内小が統合されて 1 ヶ月。統合前から積極的な交流をしていたおかげで旧荻小の児童もスムーズに入っているようだ。小規模校では多様な選択肢が限られる一方、学習面では個人へ丁寧に指導してもらえる面も。一方、大人数に早い段階で慣れることも大事。今の段階で(統合後の)宮内小の様子は教委へ上がってきているか。(加藤委員)

A. 大きく「戸惑う」子は少なかったと聞いている。荻小から来た児童を「お客様」として迎えるのではなく、一緒に仲間として新しい歴史を作っていくとい

うことを教職員全体で確認しており、不安や心配事を持っている子どもや保護者がいればきちんと対応していく。(学校教育課長)

Q. 勉強をするにあたり、1学級に何人くらいの子どものほうがちょうど良いと考えているか。(井上委員)

A. 現在、さんさんプランということで1学級33人を基準とされているが、実際にやってみると30人を超えるとちょっと多いなという感覚。1クラス20人台くらいがちょうど良いと感じる。小学校では、2~3学級あれば、6年間でクラス替えもしながら様々な子ども同士の触れ合う機会も多くなると思う。
(赤湯小学校長：板垣委員)

Q. 部活動の地域移行について、学校としてはどう考えているか。また先生にもパートタイムの方が多くなっていると聞く。その辺の状況はどうか(皆川委員)

A. 部活動の地域移行については、現在、国の方針として、休日の部活動を自ら選んで取り組んでいけるような体制づくりを進めている。
市内3中学校は、部活動の加入については「任意」とし、主体的に関われるような選択肢を学校や地域において提供している状況。
2点目の教員のパートタイムに関しては、全国的に教員不足の状況であり、育児休業や産前産後休暇とかに入られる先生方に代替する方が充てられないこともある。やっと代替教員がについても「非常勤」ということもある。
(学校教育課長)

(意見)

・高等学校の教員の経験から。学校の規模が小さくなると、教員の数も減少するため、カリキュラム等の自由度が少なくなってくる。また、教員の負担も増える。子ども達の将来を考えると、カリキュラム当の自由度がある程度確保できるくらいの規模があった方がよい。(竹田委員)

・日本の人口、最高で1億2000万人が2100年度には6400万人に減少する見通し。人口減少が大変だということを痛感している。
今後は、メリットデメリットは多少あるだろうが、統合を進めていくことは必要。あわせて、地元に残ってもらえるような教育をすすめていければ良い(佐藤委員)

・子どもが小滝小と荻小・荻小と宮内小、両方の統合を経験したが、子ども達の小学校生活は小規模校ではあったが、一人一人先生方から手厚くしてもらいとても幸せだった。子どもに聞いても、学校生活で一番楽しかったのは(統合前の)小学校と言う。ただ、統合後は少し慣れる時間が必要な部分も。
複式学級も、マイナスの意見もあるが複式ならではの良さもあると思う。
今回の荻小の人数はさすがに統合やむを得なかったと思うが、児童数が少ないから絶対ダメということはなく、小規模校での経験をうまく活かせると良い。
ただ今後の南陽市の人口推移を見る限りでは、中学校は一つになるのが良いのではないか。(川合委員)

・子どもが現在中川小で、学年に男女1名ずつの2名しかいない。複式学級は、人に教える経験もできるところに良さがある。子ども達は学年を超えて仲が良く、先生も子ども達に目をかけてもらえるので、小規模校が悪い所ばかりということはない。ただ、現実問題、1学年2人ではやはりできることが限られる。ましてや「男女」なので、同性同士の関わりは学年を超える。そういう意

味では赤湯小への統合は進めるべき。(佐藤(絵)委員)

・漆山小は複式にはギリギリなっておらず、1学年10名程度で1クラス。学校の雰囲気は昔に劣らず活気があると感じる。先生にも一人一人に目をかけていただいておりますととても良い。

しかし、ひと学年10名を切っており、将来的には統合にせざるを得ないのではと考えている。地域の良さを知る、地域と関わっていくという部分をふまえての統合が望ましい。(高橋委員)

・子どもの教育を考える上では、先生の働く環境も同時に考えていく必要があるのでは。適正な人数、適正なクラスで先生と子ども達との環境の調和をはかっていく、ある程度余裕のある環境は大事。(遠藤委員)

・小学校をいくつか回る機会があったが、少子化の問題、南陽市の出生数の減少はどの学校でも危惧しており、大きな問題だと感じている。また、市内学校施設の老朽化も目立つ。

小さいところから大規模校へ入った場合、子供にしてみても不安があったり、親にしてもいじめ等の心配もある。高校を卒業する頃になって、大規模校で過ごす不安や悩みがあったと吐露した子もいた。学校がある程度以上の規模になることが良いことばかりではないが、適正配置の検討は避けては通れないと感じる。(小林委員)

・子ども達が地域との関わりがあるといっても、多くの地域住民にとっては学校の様子は見えにくいもの。回覧で回ってくる「学校だより」が情報源である程度。

その中で気になっているのは学校の衛生面。最近は児童が少ないので、学校ボランティアで地域の人に来てもらい「お掃除の日」的なものを行っているが、小学生がたった1人でトイレ掃除をしなければならなかったり、5人で体育館の掃除をするといった現状がある。地域のボランティアが入ってやっと学校をきれいに保っている状況を見ると、統合の話も本当に避けられない段階にきていることを実感している。(對間委員)

・小規模校の子ども達は、1人1人の責任が大きいのでいろんな体験ができています。また地域の中で地域の方に育ててもらっていたと感じる。例えば荻小や中川小が統合でその地に子ども達がなくなると、その地域との関わりが希薄になるので、「地域総合型教育」の中で地域の伝統など大切なものをどう掴んでいくかということを考えていかなければならない。(廣居副委員長)

(委員長まとめ)

今回は全ての委員にまんべんなく話をしてもらった。南陽市並びに教育委員会が、今回の委員会設置により検討委員に意見を求める機会を与えているので、1人1人から忌憚ない意見をもらい、まとめたものを教育委員会から市当局に伝えてもらうことが大事。各委員素晴らしい見識をお持ちなので、たくさん意見を出してほしい。

○その他

次回委員会：6月27日(木)開催予定(市役所4階大会議室)

(閉会)